上映映画解説 NO. 10
1953, 8

Zigomar

国立近代美術館
フィルムライブラリー

"ジゴマ"鑑賞会について

フィルムライブラリーでは、その事業の一部として歴史的価値のある芸術性豊かな映画を鑑賞するため、「ジークフリート」「ヴァリエテ」「アッシャー家の末裔」と鑑賞会を続けて開催して来ましたが、今回は「ジゴマ」をとり上げることにしました。

「ジゴマ」は、一九一一年(明治四四年)フランスのエクレエル社で製作され、わが国では同年十一月一日浅草金竜館で封切され、一大センセーションをまき起し、大正元年には上映を禁止された有名な映画です。

ジゴマについて

牛原虚彦

○ジゴマの出来た時代

一八九五年、フランスのリュミエール兄弟がシネマトグラフを発明すると、一八九七年にはストオリイ映画の世界の始祖とよばれるジョルジュ・メリエスがモントルーイに撮影所を建設、ファンタスティックな素材や奇想天外のアイディアで独創性に富む数々の映画を製作しはじめた。フランス映画の伝統は、このメリエスに源を発するといわれているが、その代表作「月世界旅行」やトリック喜劇に見られるように、彼の功績は映画には映画のみ独自の世界があることの発見であった。ところが、十年ほどたつと、これらのファンタスティックな、あるいはスラップスティックな喜劇映画は非芸術的で低級な余興であると批難し、芸術的に価値ある文芸作品などを映画化しなければならぬと主張する文壇や劇壇の大御所たちのグルウプがあらわれた。ジュウル・ルメエトル、アンリ・ラヴダン、ル・バルジイなどを中心とする "Le Film d'Art" や "Société Cinématographique des Auteurs et Gens de Lettres", "Association Cinématographique des Auteurs Dramatique" それである。例えばル・フィルム・ダアルの第一回作品である「ギイズ候の暗殺」の場合、アカデミイ・フランセエズの会員ラヴダンが演劇の脚本を書く方法でシナリオを執筆し、コメディ・フランセエズのソシエテエルのル・バルジイが舞台そのまま、の名優ぶりを発揮、それをそのまま活動写真に撮ればそれで芸術的な高級な映画ができると信じている風だった。彼等はバルザック、プレヴォ、シェクスピア、ディッケンズ、メリメ、サルドウ、ドオデエ、ゾラ、ユウゴウ、デュマなどの作を活動写真化したが、すべての技法を舞台劇に追随する有様で映画独自の技法は無視されて、有名小説、有名演劇をそのまま、コピイすることが映画界の主流となりはてたかに見えた。メリエスに源を発するアクションを主体とする映画独自の表現や構成力は全く見失はれたかの感じだった。むろん彼等の功罪は歴史的に見て軽々しく断定を下すことは出来ないであろうが、一時的にもせよフランス映画がメリエス以来のオリジナリティやファンタジイを失い、文芸作品や舞台劇に従属の形におちいったことは否定出来ない。このことはサラ・ベルナアル主演の「エリザベス女王」が契機となって、"Famous Players in Famous Plays"(有名な芝居に有名な俳優を)という標語をもってアメリカのアドルフ・ヅウカアに映画事業をはじめさせたほどでもその影響力の広さが想像出来るといえよう。

しかし、かかる情勢の中にあってもメリエス以来のフランス映画の伝統を守った人々がないのではない。チャプリンをして「私に私の技術を教えてくれたマックス・ランデ」とその肖像に記さしめた喜劇俳優のマックス・ランデ(監督は主としてルイ・ガスニエ)、ボアロウというお人好しで、あわてもので、無器用な男(わが国では新馬鹿大将と呼ばれた)を主人公としたスラップスティック喜劇俳優のアンドレ・デエド、それからロマン・ポリシエ(探偵連続映画)で活躍した監督フウイヤアド(代表作「ファントマ」原作は世界的に有名になったピエール・スヴェストルとマルセル・アランの探偵小説――黒い夜会用のマントを着た覆面の怪盗ファントマが神出鬼没、探偵のジュウヴと虚々実々の追跡、逃亡のサスペンスを見せる映画。ファントマに扮したルネ・ナヴァアルは一躍世界映画界の人気者となった。)や前記マックス・ランデの喜劇映画の監督であったルイ・ガスニエ(アメリカに渡ってパアル・ホワイトの「ポオリンの冒険」「拳骨」などでアメリカ連続映画の創始者となった。)、今回上映の「ジゴマ」や「ラロテア」の監督者ヴィクトラン・ジャッセなどの人々がいる。これらの人々の映画はスラップスティック・コメディであり、あるいは、連続探偵映画ではあったが、説明、会話字幕を多量に必要とする文芸映画や舞台劇のコピイ映画と違って、アクションを中心とした映画的な映画であって、フランス映画の伝統は所謂「芸術映画」の攻勢の中にも、こうした映画によって孤塁を守りぬいたともいえよう。たとえ一部のインテリ階級に低劣と嘲られようとも多くの大衆が、これらの映画により以上の魅力を感じたことは幸であった。

○監督 ヴィクトラン・ジャッセ

この「ジゴマ」の監督ヴィクトラン・ジャッセについて「世界映画史」の著者ジョルジュ・サドゥウルは次のようにいっている。

『ジャッセが新聞小説の映画化に秀でていたとしても、また「闇の国にて」(Au pays des Ténèbres)([redacted])未完の連続物)のようにゾラ風の写実主義的な多くのドラマを監督したことも忘れてはならない。ジャッセの作品は、今日では殆んどすべて破壊されている。しかし、残っているいくつかの作品からは非常に真摯な近代主義のはげしい詩味が感ぜられる。そこにはフウイヤアドの最もすぐれた作品の中と全じく、フランスの映画の基盤となっているもの、ガンスとエプスタン、ブーリダルとフェデエを経てルノアールとカルネに至るのが見られる」(岡田真吉氏訳九三頁)

「フランス映画の衰退は、すでにジャッセが死んだときにはじまった。……しかし、ずっと以前から、その芸術上の帳尻は連続映画と喜劇を別にすれば、赤字となっていた」(同書九四頁)

以上の言葉から見てもジャッセが単なる連続映画の監督でなく、そのフランス映画史上に占める位置も明らかだと思う。

ジャッセは、もとヒッポドローム座の無言劇の構成者で、一九〇五年、ゴオモン社がビュット・ショオモンに大撮影所を建設した時、同社に入り直ちに第一回作品「阿片吸飲者の夢」をとっているが、後ゴオモン社を去り、一九〇八年エクレエル社に入り最初にとったのが連続映画大流行のさきがけをなす「ニック・カアタア」である。はからずもこの映画が公開されたのがル・フィルム・ダアルの第一回作品「ギイズ候の暗殺」と同年度であることも面白い。

彼は「ジゴマ」其他の映画をとった後、一九一三年六月、やはり連続映画「ラロテア」の撮影中五十一才で他界した。

○ジゴマ

エクレエル社はニック・カアタア物の大成功で新聞小説の映画化に力を注いだ。「ジゴマ」(Zigomar)はパリの有力紙「マタン」連載のレオ・サジイの探偵小説で、サドゥウルによれば、

「想像力に溢れた彼は撮影中にシナリオを即興的に考えついた。彼はマタン紙のレオ・サジイの作から覆面の賊の名ジゴマを得た。しかし彼はその千メートルの映画(「ジゴマ」「神出鬼没のジゴマ」"Zigomar" "Zigomar peau d'Anguille" 「ジゴマ対ニック・カアタア」Zigomar contre Nick Carter)の脚本を撮影中に創作した」

とあるからシナリオも彼の手になるものであろう。一九一一年のことであ

る。（ジゴマの製作年度、その作題には種々異説があるが、この稿はサドウルに據った。）

内容は、或は覆面、或は巧妙なる変装をこらして神出鬼没の怪盗ジゴマと、その一団が、婦女誘拐、殺人、列車強盗、放火、爆破などという凶悪なる犯行を重ね、抵抗するものあれば射殺、犯罪の現場には乙の文字を残して彼を追跡する探偵（前篇はポウリン・ブロケ、後篇はニック・カアタア）に挑戦し、怪盗も探偵も変装の技術を競いあうのであるが、逃亡の巧みなジゴマは、あらゆる犯行を敢てして逃れ、時には雪深き峡谷の追跡となり、時にはボートを飛行機で追跡、爆薬を加えて行なわれるなどというセンセエショナルな映画、飛行機の発明が一九〇三年であり、始めてドウヴア海峡の横断に成功したのが一九〇九年のことだから、一九一一年製作のこの作品に、ジャッセが飛行機をとりいれたことは、当時としては全く驚異に値することだったのであろう。探偵のポウリン・ブロケは巧に働き、代ってニック・カアタアの登場となるのであるが、変装自在というべき商者の腕くらべは、当時の観客を魅了したものである。遂にジゴマはニック・カアタアに屈伏するのであるが、この不屈の怪盗は「生きて貴様の鎖をつけるようなジゴマじゃないぞ！」自らの生命を断つのが終りである。

主役のジゴマにはオデオン座の名優アルキリエル（サドウルの世界映画史、その他の文献にはアントアヌ座となっているが、この映画のタイトルにはオデオン座のアルキリエルと明記されている）が扮し凶悪かつ変幻自在の変装を利用するジゴマを色彩ゆたかに肉体化するすぐれた技術を示して大好評を博した。探偵ポオリン・ブロケには、やはりオデオン座カリアベルが扮しアルキリエルと技を競っている。其他の出演者は、ジルベエル・ダルウ、ポウル・ギイデ、ジャッセ監督の最後の作品「プロテア」に主演したジョセット・アンドリオ、カミユ・バルドウ、バタイユなどであったが、ニック・カアタアに扮した俳優の名は、私の手許にある文献にも、タイトルにも発見出来ないのが残念である。

この映画が日本で最初に公開されたのは明治四四年（一九一一年）一一月一日、浅草金龍館においてであった。《田中純一郎著日本映画史第一巻（二二八頁～二三〇頁）に據る》 封切以来建白観客が殺到して当時としては例のない一ケ月間もロングランという大当りの映画であった。続いて全国的に公開されるに及んでこの凶悪犯人の名を知らぬものはないほどの興行価値を示し、ジゴマの名は、そうした凶悪な犯罪者、或は怪盗の代名詞として一般に通用するようになった。遂にはその犯行の手口を真似る青少年も続出するという次第でこの映画はげしい批難の的となり、翌大正元年一〇月以後は絶対公開禁止となった。私はども少年の時をどろかして、今でいえば、このギャングを主役とするスリラアに目をみはった一人である。

この映画を今回、とりあげるに至ったのは、前記のサドウルの言葉「フランス映画の衰退は、すでにジャッセが死んだときにはじまった。……しかし、ずっと以前から、その素質上の脆弱は連続映画と喜劇を別にすれば、赤字となっていた。」にも示されるフランス映画の伝統を生かした歴史的な価値を高く評価してのことである。右為念。

（この稿の材料は多くGeorges Sadoul: Histoire générale du Cinéma Vol II, Pierre Jeanne, Charles Ford: Histoire du Cinéma 1895～1929に據った。）